

プールサイド・ママ

日本が水泳王国の座を追われてもう久しい。東京オリンピックでもあがらぬ日の丸に、国中がやきもきしたものだ。田畑真美子さん（女子聖学院中・1年）は当時小学1年生だったが、小さい心に一つの決意をした。

「私が日の丸をあげてやる。」

以来、真美子さんと水との戦いが始まった。そして同時に母親美代さんのプール通いが始まった。大きな目標にむかって泳ぐ真美子さん、首に掛けたストップウォッチとにらめっこする美代さん、そこには水泳にかける厳しさと母と子の愛情が複雑に入り混ってくる。

「泳ぎを見ていると健康状態がわかります。ええ、毎日プールに来ます。水泳バカって言うんでしょうネ。」と明るく笑う美代さん。

9才で海外遠征、次代のホープと期待される橋本宇宏君（昭和小・4年）彼は水泳を始めてまだ2年、だが今年年齢別（9歳の部）で日本一の泳者になった。この驚異的な進歩について、東京スイミングセンターの秋元監督は「本人の努力です。そして母親の愛情です。」と言う。「水泳は先生にまかせていますから……。」とひかえ目に語る母親の信子さん。しかしプールサイドでの語らいの中でも、目だけはプールの宇宏君に注がれる。

不振の日本水泳界、建て直しの鍵は案外このプールサイドのママがにぎっているのかも知れない。ガンバレノ、プールサイド・ママ。

お線香たいて珠数さげて

お盆。今は亡き人の魂が生きている人の胸に静かによみがえる。片手に花をもち片手にお線香と数珠をさげて夏の陽を日傘でおおいながら、歩くお婆あちゃん。石だたみの墓地の道にお墓まわりの姿がみられる。

仏教の長い歴史と結びついたお線香と数珠は、日本人の生活の中で魂に安らぎを与えるものとして役割を果たしてきた。数珠のひとつひとつの玉にどれだけの人間のざんげや願いや、忘郷が含まれているか知れない。

お線香にしてもあの神秘的なおいは、人間に虚しさの中に安らぎを与えてくれる。実際あるお線香メーカーは「においの調合は絶対秘密です。」と語る。しかし、世の中、変わった?!

カッコ良けりゃいいじゃないかというフィーリングの若者の中で、数珠風ネックレスやお線香、お香が見えないブームが続いている。お香を焚きながら、お酒をのみ数珠を下げてめい想にふける。

発端は、ヒッピーが仏教にあこがれて、数珠を首にぶら下げ、お線香をパーティーで焚いたのが流行し、日本に逆輸入されたらしい。しかし、若者の中で、お線香、お香、数珠がアクセサリやイミテーションとして、流行しているという事は、考えようによっては、世の中、安らぎや調いがそれだけなくなっているのだろう。